

安房妙本寺日我と蔵書——「曾我物語」「八雲抄」などをめぐって——

佐藤 博 信

はじめに

安房妙本寺（千葉県安房郡鋸南町吉浜字中谷^{なかや}）の住持日我（永正五年（一五〇八）～天正十四年（一五八六）十一月十一日）は、京都要法寺（京都市左京区）の日辰（永正五年八月二十六日～天正四年十二月十五日）と「東我西辰」（「西辰東我」とも）と称される戦国時代の富士（日興）門流を代表する日蓮僧・学僧である。^①

とすれば、多くの著書・蔵書が存在したであろうことは、想像に難くない。その著書の概要についてはすでに紹介されているが、蔵書についてはなお未検討な状態といつてよい。それが如何なる書籍群であったのかは、中世の知識人たる僧侶の知的源泉を確認する意味でも、興味深い問題である。^② 小論で検討する所以である。

もちろん、それは、妙本寺という寺院が所蔵していた書籍と分かち難く存在していたに違いない。それを含めて総体として、日蓮宗寺院・僧侶の蔵書の在り方が注目される。例えば、宗祖日蓮の蔵書の有り様の一端は、慶長八年（一六〇三）十月十五日付身延山久遠寺御霊宝記録Ⅱ乾師目録（身延山久遠寺蔵）に窺われるし、また南北朝時代の中山法華経寺の住持日祐（永仁六年（一二九八）～応安六年（一三七四）五月十九日）段階のそれは、

康永三年（一三四四）二月九日付本尊聖教録（中山法華経寺蔵）によって大略知られる。⁴⁾

第一章 「いろは字」編纂の前提

まず、日我が天文二十三年（一五五三）二月以降執筆を始め、永禄二年（一五五九）十二月十日に完成させた古辞書「いろは字」上下二巻のうち、現存する下巻に出典書名のあるものは、鈴木博『妙本寺蔵永禄二年いろは字 影印・解説・索引』（清文堂出版、一九七四年五月）によれば、漢籍・国書（和書）・仏書併せて二十四点にすぎない。内訳は、漢籍Ⅱ「易经」^{（えいきぎょう）}「毛詩」^{（もうし）}「礼記」^{（らいき）}「論語」^{（ろんご）}「孟子」^{（もうし）}「莊子」^{（しやうし）}「千字文」^{（せんぎぶん）}「史記」^{（しき）}「漢書」^{（まんしやう）}「文選」^{（もんぜん）}「遊仙窟」^{（じやうくわく）}「貞観政要」^{（しんかんせいよう）}「白楽天作文」の十三点、国書Ⅱ「日本紀」^{（にっぽんぎ）}「万葉集」^{（まんやふし）}「伊勢物語」^{（いせものがたり）}「古今集」^{（きんぎふ）}「源氏物語」^{（げんじものがたり）}「平家物語」^{（へいけものがたり）}「八雲御抄」^{（やくもぎのり）}「太子伝」^{（たいしでん）}「職原抄」^{（しやくげんしやう）}「曾我物語」^{（そがものがたり）}の十点、仏書Ⅱ「法华音義」^{（ほふけおんぎ）}の一点である。

次いで、法華経の語句を解説するために要文を蒐集した、日我筆とほぼ推定される妙本寺蔵「弘通要文集」上巻（写本）^{（しやほん）}に注目してみたい。「いろは字」編纂と深い関わりが想定されるからである。それには、漢籍Ⅱ「大學」^{（だいがく）}「論語」^{（ろんご）}「孟子」^{（もうし）}「中庸」^{（ちゆうちゆう）}「毛詩」^{（もうし）}「尚書」^{（しやうしやう）}「周易」^{（しゆうい）}「春秋」^{（しゅうしゅう）}左伝「礼記」^{（らいき）}「蒙求」^{（もうきゅう）}「千字文」^{（せんぎぶん）}「胡曾詩」^{（こそうし）}「史記」^{（しき）}「十二本記」^{（じふにほんき）}「十表」^{（しゅうひょう）}「八書」^{（はっしやう）}「三十世家」^{（さんじゅうしせい）}「七十列伝」^{（しちじゅうりつでん）}「漢書」^{（まんしやう）}「後漢書」^{（こうまんしやう）}「文選」^{（もんぜん）}「（白氏）文集」^{（はくしぶんしゅう）}「（元氏）文集」^{（げんしぶんしゅう）}「爾雅」^{（にが）}「老子経」^{（らうしきやう）}「貞観政要」^{（しんかんせいよう）}「類林」^{（るいりん）}「老子伝」^{（らうしでん）}「初学純」^{（しよがくじゆん）}（初学記）^{（しよがくき）}「列子」^{（れつき）}「莊子」^{（しやうし）}「臣軌」^{（しんき）}「帝範」^{（ていはん）}の二十八点、国書Ⅱ「日本記」^{（にっぽんき）}「統文粹」^{（とうぶんすい）}「日本後記」^{（にっぽんこうき）}「統記後記」^{（とうきこうき）}「統日本後記」^{（とうにっぽんこうき）}「文徳実録」^{（ぶんとくじつろく）}「三大実録」^{（さんだいじつろく）}「類聚国史」^{（るいしよくこくし）}「本朝麗藻」^{（ほんちやうれいそう）}の九点、仏書Ⅱ「正法華経」^{（しやうぽうけ）}「薩曇分陀利経」^{（さだんぶんたろく）}「法華三昧経」^{（ほふけさんまいきやう）}「方等法華経」^{（ほうとうほふけ）}「妙法蓮華経」^{（めうぽうれんけ）}「添品法

華経」の六点、がそれぞれ記載されている。

この両者を併せると、漢籍Ⅱ「易经」「毛詩」「礼記」「論語」「孟子」「莊子」「千字文」「史記」「漢書」「文選」「遊仙窟」「貞観政要」「白楽天作文」Ⅱ「(白氏)文集」「大学」「論語」「孟子」「中庸」「尚書」「周易」「(春秋)左伝」「蒙求」「胡曾史」「(胡曾詩)史記」「(十二本記)十表」「八書」「三十世家」「七十列伝」「後漢書」「(元氏)文集」「爾雅」「孔子経」「貞観政要」「類林」「老子伝」「初学純」「(初学記)列子」「臣軌」「帝範」の三十四点、国書Ⅱ「日本紀」「万葉集」「伊勢物語」「古今集」「源氏物語」「平家物語」「八雲御抄」「太子伝」「職原抄」「曾我物語」「続文粹」「日本後記」「続記後記」「続日本後記」「文徳実録」「三大実録」「類聚国史」「本朝麗藻」の十八点、仏書Ⅱ「法花音義」「正法華経」「薩曇芬陀利経」「法華三昧経」「方等法華経」「妙法蓮華経」「添品法華経」の七点、という具合である。併せて、五十九点となる。

このなかで、本来外典Ⅱ漢籍・国書よりも多く存在したに違いない内典Ⅱ仏書が、ごく一部しか確認されていないのは、辞書の編纂という所期の目的と関わりう。その意味で、大凡の傾向の把握に留まるとすべきである。⁽⁶⁾ それにしても、漢籍の多さは、注目される。またその四書・五経・三経を始め、辞書類・教科書類など基本的な文献が備えられていたことも、注目される。在地寺院としての妙本寺の一面と、当時の僧侶Ⅱ知識人としての普遍的な学問の有り様の一面が窺われて興味深い。日我も漢詩をよくしたことは、「唯我尊靈百日記」や「日我上人御臨終記」(辞世の一句)など随所に窺われる。

いずれにせよ、これらは、辞書編纂との関わりでみえた日我の蔵書の一部にすぎない。それさえ、下記の様な困難な条件下で「類聚」されたものであった。というのは、「いろは字」下巻の奥書に「於東西都鄙、求学之内

外典、其員繁多、爰総房両州之堺金谷籠城、于時天文^{癸丑}七月十三夜、竊士侵味(実)城、放兵火、因茲諸(書)籍悉焼亡、同^寅二月以来、或竟字抄之切湍、或任他人之口説、且為小性教訓、且為当宗頑愚、類聚之」「文庫焼却」とみえ、また日我「一流相伝大事私」に「天文二十二年^{丑癸}六月二十六日房州逆乱相起、同七月十三夜於金谷城、当寺世出道具悉焼失畢、聖教櫃・皮籠・笈、牛十駄余焼失、依之聖教・俗書無所持耳」「諸冊子、於金谷城為灰燼」「諸聖教、於金谷城焼亡」とみえ、さらに「里見義堯室追善記」(『千葉県の歴史資料編中世3 (県内文書2)』二〇〇二年三月)に「御文天文廿二年七月廿(十) 三夜金谷実城^{ニテ}、悉焼失」、「我邦雜記」(同上)に「三信記ト物本一卷作テ有シヲカナヤ(金谷)ニテヤク」、「観略大綱聞書」(要山蔵書目録)に「正本於金谷焼失之処、以此本納置処也、日我(花押)」などとみえるからである。⁽⁸⁾

すなわち、日我は、籠城した金谷城で持ち込んだ妙本寺の諸道具・仏具のみならず蔵書のほとんどを焼失し、その困難のなかで、まず基本的な文献となる「いろは字」の編纂を始めたのであった。その困難さは、「聖教」さえ「牢人之内、北郡平久里郷大懸村^{仁天}台当二家之聖教之端々見当処、当家者愚思出次第任筆」と述べる程であったのである。またこれらの閲覧・「類聚」のうえで本寺妙本寺・末寺・旦那のみならず他門流とのネットワークも、重要な役割を果たしたことは、想像に難くない。

第二章 現存「曾我物語」などとの関係

ところで、問題は、これらの書籍が果たして妙本寺に現存するの可否かである。その点、日我は、永禄十年

(一五六七) 十月十三日 (宗祖日蓮忌^{えしき} お会式) に谷山妙顕寺 (鋸南町吉浜字谷山、現在は鋸南町大六に所在) に隠居した際に、私物^{えしき} 〓「本尊・聖教・笈五丁・櫃入物十斗」を持参し、その一部は「手ツカラ虫干ヲメサレ」たという (『日我上人御臨終記』『千葉県の歴史資料編中世5 (県外文書2・記録典籍)』二〇〇五年三月)。しかも、それらを死去後に「僧衆・旦那・ヨシ (縁) 方」に形見分けする様に指示していたことを考えると、その大略は、その後に散逸したとみるのが妥当であろう。とすれば、そもそも、日我から妙本寺に寄進されたものの、偶然残されたもの、もともと妙本寺蔵のもの、など、より限定された伝来が想定されようか。

そこで、「いろは字」下巻と「弘通要文集」上巻にみえる書籍で、現存する書籍との関係を検討したい。例えば、「いろは字」下巻に二箇所引用されている「職原抄」である。現存する日我「職原抄私」下巻には、奥書に「永禄六年^{戊午}二月下旬已来九州下向之時、自然執心之方有之者可伝授、所用而、於路次中、連々書之、上下二帖草案之功畢、老眼与云病氣与云、清書^二成間、長狭宮内卿^於以両卷之私、清書也、於路次中^モ帰寺之後^モ、競望・念願ノ人依無之、不談之、余事^ニ為末代、清書・書写之本置残処也、仍示書如件」とみえるのである。日我は、日向下向の際に「職原抄私」上下二巻を持参し、その路次中に写本を作成したというのである。その際に清書をしたのが、長狭宮内卿であった。^①

とすれば、永禄六年当時、その底本「職原抄」上下二巻が存在していたということであろうか。それが「いろは字」編纂の際に利用された可能性は否定できないが、先述の如く、蔵書のほとんどを金谷城で焼失したことを考えると、それ自体現存しないが、その後の「類聚」の可能性が高いのではなからうか。また現存する「職原抄私」下巻も、長狭宮内卿が清書した写本自体というよりもほぼ同時代 (戦国末期) に弟子 (日恩か) によって再

写された古写本（綴葉装）の可能性が高い。いずれにせよ、「いろは字」編纂に利用された「職原抄」は現存していない。なお、「執心之方」の存在やその多くの写本・注釈書の存在は、「職原抄」が「古典」として、また政道論の専門書として、「貞観政要」などと並んで大いに読まれたことの証であらう。¹²

次いで、「曾我物語」である。それが、いわゆる妙本寺本「曾我物語」（十巻）であるのか否かも、問題である。確かに真字（名）本として名高い妙本寺本「曾我物語」は、日向白杵院四位公日助（日向本東寺の住僧ならん）が天文二十二年（一五五三）六月二十一日に妙本寺に寄進したものであるが、当時の妙本寺周辺は房総里見氏と後北条氏との間で戦争前夜という危機的な状況にあり、先述の通り、日我自身、上総金谷城（千葉県富津市金谷）に籠城していた可能性が高く、その意味では、妙本寺での直接授受の可能性は極めて低い。むしろこの年月日は日助が日向本東寺（宮崎県延岡町松山町）にあって記したもので、実際に日我が受け取ったのは、後日であったのではなからうか。なお、日我が妙本寺に寄進するに際して記した花押形は、もちろん天文二十二年八月段階のもの（「妙本寺文書」一二・三六四）とは微妙に異なり、その後のものである。

すなわち、両者は、別物である可能性が極めて高いのではなからうか。その点は、鈴木氏が「いろは字」引用の「曾我物語」（「眩等」）に「右に注して『和字。ソガナドニヨム』と記している。しかし『妙本寺本曾我物語』の索引からは『眩等』は検索されない」と述べられている点とも結びつこう。その日助が底本とした「曾我物語」は、不明とされる。この寄進された妙本寺本「曾我物語」は、宝永六年（一七〇九）三月には日向飢肥（宮崎県日南市）藩主伊東祐福家の希求に応じて同家に渡り、¹³アジア・太平洋戦争後、流転の果てに文化庁保管（重要文化財）に帰したのであった。

また、天文二十三年四月から十一月にかけて、妙本寺末駿河小泉（静岡県富士宮市）久遠寺代官日義（後の北山本門寺日殿のこと）によって「曾我物語」が書写されているが、それが、現在の北山（重須^{おもす}）本門寺本「曾我物語」である。これは、従来妙本寺本「曾我物語」の転写本とみられてきたが、¹⁵これまた別物であることがすでに明らかにされている。ただ小泉久遠寺代官日義の書写した底本が、「いろは字」に利用された「曾我物語」であつた可能性は皆無ではない。

その他、前掲鈴木著書に妙本寺に「日我自筆の『貞観政要』があるとのことである（近藤喜博博士教示）」とあるが、現在妙本寺にある「貞観政要」は、すでに拙稿「安房妙本寺所藏『什物台帳』¹⁶」の「解題」でも指摘した様に、日我段階のものではなく、大正八年（一九一九）八月作成の北山（重須）本門寺藏本（宗祖日蓮御真筆。重要文化財指定）の複製本である。

なお、永禄十一年（一五六八）八月一日以降に纏められた「里見義堯室追善記」には、「源氏物がたり（語）五十帖」から種々引用されているが、それが「いろは字」で利用されたものと同一本であるか否かは不明である。やはり別物の可能性が高いと思われるが、それも現存していない。私物として散逸したものと思われる。

以上、「いろは字」下巻と「弘通要文集」上巻にみえる書籍で、現存日我「職原抄」私下巻の底本との関係が想定された「職原抄」も、また妙本寺本「曾我物語」（十巻）も、いずれもその編纂の際に利用された原本ではない可能性が高いと推定された。

第三章 「八雲抄」の出現

ところで、上記の「いろは字」編纂に利用された国書の一点、「八雲抄」と同名な書物が、過日某古書店を通じて確認され、その後、妙本寺の所蔵に帰したのであった。以下、その内容の一端を紹介し検討したい。

そもそも、「八雲抄」（「八雲御抄」とは、鎌倉時代初期の順徳天皇（建久八年（一一九七）七月七日）仁治三年（一二四二）九月十四日）が、編集・集大成した六卷（正義・作法・枝葉・言語・名所・用意各部）からなる歌学書である。以後の多くの写本・注釈書の内容は、歌学の専門書として珍重され、「古典」として多に読まれたことの証である。例えば、先述の中山法華経寺住持日祐の本尊聖教録にも、「源氏目録一帖」「伊勢物語事四帖」「古今集ノ注三帖」などと並んで「歌双紙等」（十八点）の一冊として「八雲抄一、（帖）」がみえる。過日確認されたのは、その六卷のなかでも、もっとも重要とされる第二卷「作法部」一冊（以下、本書と称す）である（写真版参照）。帙入りで、料紙は鳥の子、装訂は冊子（袋綴・裏打ちあり）である。なお、題箋「八雲抄妙本寺日我旧蔵本 一冊」は、はるか後年に帙入りに際して作成されたものであろう。

この「八雲抄」第二卷「作法部」については、片桐洋一編『八雲御抄の研究 正義部作法部本文篇・研究篇・索引篇』（和泉書院、二〇〇一年一〇月）が主要な国立国会図書館本・宮内庁書陵部蔵細川幽斎本・国立公文書館蔵内閣文庫本を掲載し、その異同を明らかにしている。本書が、その如何なる系統に属するかなどの文献学的研究は、その道の専門家による精査研究を待ちたい。

本書には、「倉塹」「蔵書」（一・一・一・一・一・一・一・一）という朱の蔵書印（写真版参照）が捺されており、倉野氏

の旧蔵本であつたことが知られる。ただこの倉野氏自体については、中野三敬編『日本書誌学大系近代蔵書印譜』(青裳堂書店、一九八四年二月以降)などを検索した限りでは、特定できなかった。本文に「合イ」「此段一本細事ニテ入」などの追筆と全体的な「此本相違之所多可校合」の朱書きがあるが、これが倉野氏のものか否かも不明である。また「益知ハ腎虚ヲ治ス下集モルミヲ書」という意味不明な墨書もあるが、これが誰のものかは不明である。

さて、本書が日我旧蔵本であつたことは、「妙本寺^{住常} 日我(花押)」の署判の存在からも間違いない。その点からも貴重な図書といつてよい。これは、妙本寺本「曾我物語」に「妙本寺^{住常} 日我(花押)」とみえ、また「いろは字」下巻に「妙本寺^{住常} 日我(花押)」とみえたのと同様、日我が妙本寺に寄進したことを示す表記である。

問題は日我の寄進した時期であるが、残念ながら、その点に関する記載は「曾我物語」と同様にみられない。そこで、注目されるのが、日我の花押形の如何であるが、それが日我の場合、必ずしも時間差をとった明瞭な変化を示さず、その系年特定の判断材料とはなりがたいのである。ただこの「八雲抄」の花押形が、永禄二年十二月十日成立の「いろは字」の日我の花押形とも、妙本寺本「曾我物語」の花押形とも、微妙に異なることは、三者三様、それぞれ寄進の時間差が存在したことを物語つていようか。¹⁷⁾

それにしても、日我が金谷城での書籍焼失を踏まえて、精力的に諸書の「類聚」と書写を行い、その延長上に妙本寺への寄進があつたことは間違いない、その点、寄進の初見がそれこそ永禄二年十二月の「いろは字」にして、それに続くのが永禄四年三月十一日付五箇相承であることを考えると、ほぼ永禄年代以降の寄進であつた可能性が高い。さらに永禄十年十月十三日の谷山妙顯寺への隠居が、その大きな契機となつたことも否定できない。

い。

その意味で、三書とも、永祿年代以降の各段階に日我から妙本寺に寄進されたと思われるのである。それが、妙本寺本「曾我物語」は宝永六年（一七〇九）三月以前に、また「いろは字」と「八雲抄」は、後年（江戸時代中後期以降か）に寺外に流失し、「いろは字」下巻のみ、ある段階に日向延岡の末寺本東寺から妙本寺に戻ったという経緯である。

なお、日我が「いろは字」編纂の際、「八雲抄」を利用したことは、同書の「八雲ニ書」「在八雲」という記載（五箇所所在す）からも間違いない。もちろん、本書がその「八雲抄」の一部であるという確証はない。それは、鈴木氏も注意された様に「中には孫引きもあるであろう」ということも、またその後の入手ということもありうるからである。その意味では、現時点でいずれとも断定し難いといわざるをえない。

おわりに

以上の検討の結果、「いろは字」下巻と「弘通要文集」上巻にみえる書籍で、現存日我「職原抄私」下巻の底本との関係が想定された「職原抄」も、妙本寺本「曾我物語」も、いずれもその編纂の際に利用された原本ではない可能性が高いことがほぼ推定された。また、この度、確認された「八雲抄」も、現時点ではいずれとも断定し難いという見通しとなった。やはり日我のいう「諸（書）籍悉焼亡」「文庫焼却」「諸冊子、於金谷城為灰燼」「諸聖教、於金谷城焼亡」という言葉が現実味を帯びてきたと認識される。それ故に、以後の精力的な諸書の「類

聚」と書写、そして妙本寺への寄進や「納置」が行われたのであった。

それにしても、そうした「八雲抄」のなかでもっとも重要な「作法部」一冊が、近時巷間に現れ、元の妙本寺に戻ったということは、奇跡的な慶事であったといわねばならない。

そもそも、日我が漢籍・国書・仏書に多大な関心を持ち、また所蔵していたことは、間違いないが、この度の「八雲抄」の出現は、そうした日我の姿勢を改めて想起せしめるものであった。それと絡んで、漢籍・国書・仏書全体を含めて日蓮僧・日我の蔵書構成を推定復元する作業は、当時の日蓮僧の知的源泉を問うだけでなく、妙本寺の在地寺院＝地域の学問センターとしての在り様の追究の面からも、今後の重要な課題である¹⁹ことを再確認し、小論を閉じる。

註

(1) 例えば、小笠原長和『中世房総の政治と文化』（吉川弘文館、一九八五年一月）、拙著『中世東国日蓮宗寺院の研究』（東京大学出版会、二〇〇三年一月）・『中世東国政治史論』（塙書房、二〇〇六年一〇月）・『安房妙本寺日我一代記』（思文閣出版、二〇〇七年一〇月）及び『千葉県の歴史通史編中世』（二〇〇七年三月、佐藤執筆分）など。以下の一般的な叙述は、これらをふまえたものである。

(2) 例えば、執行海秀『日蓮宗教学史』（平楽寺書店、一九九六年三月）、『日蓮宗事典』（東京堂出版、一九九九年三月）を参照。

(3) こうした研究は、例えば、室町期公家一条家の蔵書を検討した小川剛生「室町後期一条家の蔵書について―兼良・冬良・兼冬による保管と活用―」（『室町時代研究』二号、二〇〇八年三月）などによって試みられつつある。

(4) 本史料については、寺尾英智「聖教目録の基礎的研究―日祐『本尊聖教録』について―」（『日蓮聖人真蹟の形態と伝来』雄山閣出版、一九九七年三月）、中尾堯「日蓮真蹟遺文の継承⁽²⁾―中山法華経寺日祐の場合―」（『日蓮真蹟遺文と寺院文書』吉川弘文館、二〇〇二年三月）に詳しい。

(5) 本史料については、大谷吾道「千葉妙本寺蔵『弘通要文集』に関する考察」（二〇〇一年六月三日の興風談所勉強会での発表レジュメ。『興風』二十三号、二〇一一年二月発刊予定に掲載予定）に詳しい。その成立の時期を「下限は『いろは字』が成立した永祿二年（一五五九）以前、さらに言えば、草案のなった弘治二年（一五五六）以前と考える。また、上限は筆致からの想像だが、『開目抄』を筆写した天文十四年（一五四五）以後と考えたい」とする。

(6) 例えば、近時日蓮の思想形成上重要な位置を占めるとされる「貞観政要」「臣軌」「唐鏡」のうち「唐鏡」（藤原茂範〈元久元年【一二〇四？】作）がみえないのは如何なる事情によるうか。それは、日祐の本尊聖教録にしても同様であるが。この「唐鏡」と日蓮との関係については、山上弘道「『強仁状御返事』について―『延山録外』所収『強仁状御返事』草案から得られる新知見を中心に―」（『興風』二十二号、二〇一〇年十二月）・「『延山録外』『唐鏡要文』について」（二〇一〇年十二月三日の興風談所定例勉強会レジュメ）を参照されたい。

(7) 本史料は、大黒喜道編『安房妙本寺第十四世日我一流相伝大事私』（興風談所、二〇〇三年七月）、妙本寺本「一流相伝大事私」（日侃執筆・日涌写本）、「二流相伝」（日常執筆・奥書日我筆）によった。

(8) ただ日我が金谷城に移したのは、上記の様に妙本寺の諸道具・仏具と聖教・俗書を中心とするものであって、宗祖日蓮の曼荼羅本尊（萬年救護御本尊）や不動明王・愛染明王感見記、御書（日蓮遺文）写本などの重要寺宝類は、「宝蔵」での嚴護のみならず様々な方法で格護されたものではなからうか（拙稿「妙本寺の『虫払い』について」『中世東国日蓮宗寺院の研究』）。なお、現存する日興・日目・日郷以下の曼荼羅本尊（『千葉県の歴史資料編中世3（県内文書2）』二〇〇二年三月所載「妙本寺所蔵曼荼羅本尊目録」）や日興・日目の日郷宛以外の書状類（曾称宛書状など）が何時如何なる段階に妙本寺にもたらされたのかは、今後の検討課題である。例えば、日安曼荼羅本尊二幅など

は、前住鎌倉日櫻（二〇〇九年九月一日遷化）段階に末寺遠本寺（千葉県鴨川市奈良林字久保）から上げられたものであり、またその後も日我曼荼羅本尊二幅が檀家（笹生家・日高家）から上げられているという具合である（『妙本寺所藏曼荼羅本尊目録』未記載）。

- (9) この点は、拙稿「安房妙本寺と中山法華経寺―戦国期の一通の文書から―」（『千葉史学』五十三号、二〇〇八年二月）で素描した。

「職原ノ奥書ニアリ」

- (10) この妙本寺本の識語には、「或本云正平二年十二月一日写之畢点畢 権左中弁兼左近衛少将源顕統（中略）寛正五季^{甲申}月上旬候、以権大外記隼人正家ノ本ヲ書写読合畢 述者 日我判」とみえるものである。これは、該本が北畠親房の甥顕統の所持本の系統をひく権大外記隼人正本を書写した系統本であることを示している。いわゆる関東本である。この権大外記隼人正は、中原康顕とされる。これらについては、遠藤珠紀「職原抄」の伝来について」（阿部猛編『中世政治史研究』日本史料研究会、二〇一〇年九月）を参照。

- (11) この長狭宮内卿は、日我の依頼を受けて天正六年四月に日要本を書写した「長狭宮内卿」、天正八年五月二日に薩摩阿闍梨日長らと「妙法蓮華経文句上」にを書写した「宮内卿公日健」と、同人であろう（妙本寺蔵「（仮称）諸合本雜記」興風談所編『校訂妙本寺典籍調査』二〇〇五年七月）。長狭とあるので、遠本寺系の人物と思われる。

- (12) 例えば、白山芳太郎『職原鈔の基礎的研究』（神道史学会、一九八〇年二月）・加地宏江『中世歴史叙述の展開―「職原抄」と後期軍記―』（吉川弘文館、一九九九年九月）などを参照。

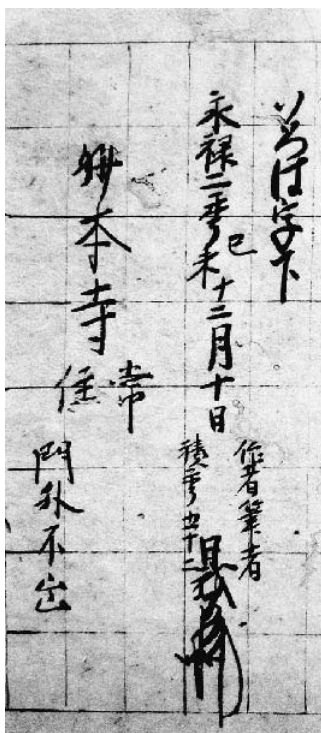
- (13) この件についての日向伊東家と妙本寺の関係を示す史料は、まったく残存していない。両者の関係は、ただ慶応元年（一八六五）十二月吉日成立の妙本寺蔵「年中行事帳」（『千葉大学人文研究』二十五号、一九九六年三月）に「六月 伊東殿へ暑中見舞状 尤役僧方之諸用ニ文段も有」とみえ、江戸時代末期に「暑中見舞状」を交換する関係にあったことが知られるだけである。

- (14) 例えば、角川源義『妙本寺本曾我物語』（角川書店、一九六九年三月）など。

(15) この点は、山口稔「富士門徒に伝来した真字本曾我物語」(『駿河』十六号、一九七〇年七月)、大黒喜道「真名本『曾我物語』と宗祖遺文『秋元御書』および日興門流の關係について」(『興風』十三号、二〇〇〇年三月)などの指摘による。ただこれらの研究成果が、昨今の「曾我物語」研究に反映されているとは、いい難い。例えば、『伊東市史史料編古代・中世』坂井孝一氏担当分、二〇〇七年三月)などをみられたい。

(16) 本史料は、『千葉大学人文研究』二十六号(一九九七年三月)に収録済みである。

(17) ①いろは字下の日我の花押形



②「八雲抄」の日我の花押形

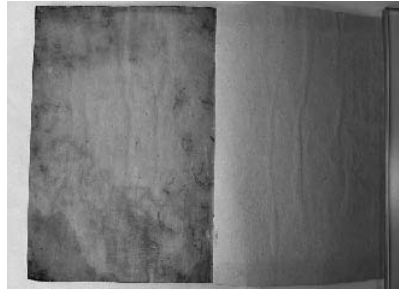
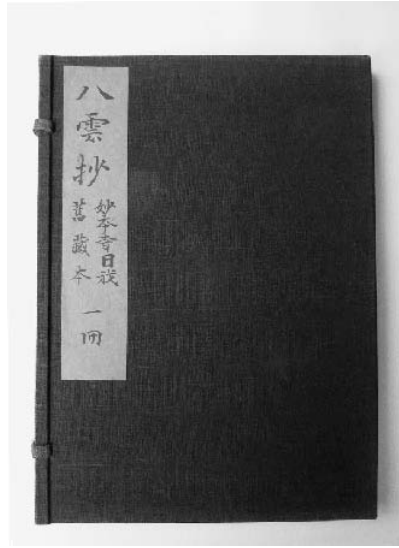


③ 妙本寺本「曾我物語」の日我の花押形



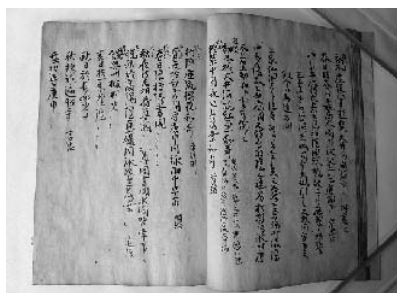
- (18) その他、近年巷間に現れた妙本寺旧蔵本に日我「立正安国論私見聞」(拙稿「安房妙本寺日我と『立正安国論私見聞』」『日本歴史』七四七号、二〇一〇年八月)がある。なお、今後とも出現する可能性がある。また近年正法寺(大阪市中央区中寺)で確認された明応元年十二月二十三日付日要奥付「宗祖要文断片」については、拙稿「安房妙本寺と和泉堺本伝寺―新出史料の検討―」(『日蓮仏教研究』四号、二〇一〇年三月)で検討を試みた。
- (19) こうした研究においては、国文学研究における「資料学」に学ぶ必要がある。例えば、中世文学会編『中世文学研究は日本文化を解明できるか』(笠間書院、二〇〇六年一〇月)所載の諸論文を参照されたい。

【付記】小論執筆に際し、鎌倉日誠・池田令道・坂井法暉諸師、内山直樹・滝川恒昭両氏から種々貴重な教示をえた。記して拝謝す。



安房妙本寺日我と藏書——「曾我物語」「八雲抄」などをめぐって——





安房妙本寺日我と藏書——「曾我物語」「八雲抄」などをめぐって——









蔵書印（拡大）